伝 宣化出土日持上人遺物と大正４年奉献本尊
大陸雄飛の夢から醒めた現代からの視点

戦時下、社会の重任を担った者たちは、当時の国策の延長線上に明るい未来を見せる役目を担った。廃仏毀釈によって大きな打撃を被った仏教各宗は少なからず国策協力によって宗団を国家統制の圧力から守る必要を感じ、国策の一端として大衆の宣撫活動を担った。しかし、そこには大きな構造のねじれがあった。当時、各宗団の施策に必要不可欠な要素は、もはや宗教の慈しみや教学による真実の追究ではなく、時代を乗り切る夢であり権力や経済の力だった。それに対し、田中智学はじめ各宗の改革運動・教学振興運動も起こったが、概して既成教団の改革運動は封じ込められていった。明治を迎えた日蓮宗は、日蓮聖人の教えが時代と符合する実感とともに、逼迫した宗門財政と宗政の混乱の打開策を模索する中で、権力や経済活動に伴う制御不能な力を自ら迎え入れた。日持上人の事績を仮想した大陸出土と記した品々も蒙古調伏国家守護の奉献天覧曼荼羅もこうした状況下に連動して生まれたと思われる。日蓮主義もまた、その後の国体論展開の一部に、これら〝遺物〟の存在を前提に論旨を展開するなど、負の影響を被った。

彼の時代の状況に立てば、奉献本尊の企画者たちに悪意は無かったと信じる。教団の困難の打開と飛躍の成果を求める焦りが、当時の担当責任者たちに、国策協力に深い楔を打つことへの緊張感を鈍らせていた。それは当初は安易な動機によって作られたと考える。しかし、敗戦の状況下から見れば、結果として国策に宗祖の架空の事績を差し出したものと映る。

実証性や客観性を軽んじ自分が理解したいように世界を理解する態度。それは自分に都合の良い物語の中に閉じこもり、結果的に他者にも何らかの行動を強要する。国策によって仕向けられているというより、時代の不安と夢があった。それは当然、現代にも再生される可能性がある。

戦後 70 回忌を迎えて、未だこうした事項を説明しない立場は苦しい。事実はいずれ断片的に明かされ、陰謀史観を伴って誇大に解釈されてしまう。また事実そうなっている部分もある。そしてまた、彼の大陸雄飛・王道楽土建設の夢は、未だ実現されない夢という立場もあろう。本報告は近代日本の日蓮主義運動の国体論展開の解析と脱歴史化に寄与する一資料として、こうした視点を基調に置き、濛々とした霧の中、かつて着けた点を時系列につなげたものである。（本資料呈示では敬称等は概ね略させていただきました）

報告：西條　義昌
平 26.　4．8 稿／改訂了

基本姿勢　**奉献本尊に関して教学的部分や蒙古調伏の事績の存否などについては所見は述べません**
奉献本尊の出現と対応に関してはポイントを絞って調査しましたので一定の所感を述べます
伝日持上人遺物９点に関して日持上人の大陸渡航の事績の存否に関して所見は述べません
伝日持上人遺物９点の伝来に関してはポイントを絞って調査しましたので所感を述べます
奉献本尊と伝日持上人遺品の関連に関しては、あえて推測を述べ研究者の資料検索に委ねます

※『江戸名所図会』（1836 年）巻七「押上の最教寺に、「鎌倉将軍惟康親王、蒙古鎮制のために書かしむる ところの日蓮上人真蹟の曼荼羅の旗あり」P

川合芳次郎；安政２年 (1855) 三重県伊賀の（神官の家※）に生まれる （※伊賀上野神戸神社？）幾松・芳次郎・米蔵（石田）【教報】**〈資１〉** ↑平民・川合伊助四男芳次郎（分家長子が幾松）	慶応４年５月 15 日→ 明治元年 1868	上野戦争鎮圧 神仏分離令	※常明寺＝伊勢に天照太神を祀った皇女倭姫陵所在 〝「両太神宮内院高日山太神宮寺」と門に掲げた〟
横浜市中区「山手公園」（外国人専用庭園）／薩摩藩関係者管理	**明治３年** 1870 →	惟神の詔 廃仏毀釈	横浜山手外国人居留区専用遊園地は妙光 (香) 寺が貸与→「横浜居留地改造及競馬場墓地等約書」慶応３
	明治５年 1872	三条教則　**伊勢祖霊社**	↑芳次郎兄弟「**外国商館売込業を勉強し富を致**」
川合芳次郎、横浜に商店を開く〈資２〉	←**明治８年** 1875	1 月身延大火・ナウマン来日	（横浜市相生町４－５９　当主幾松）**〈資１〉**
川合芳次郎、横浜で両替商を創業	←**明治 12 年** 1879 →		**12 月高鍋（徳太郎）、福岡県那珂郡竹下の紡績業家に生**
川合芳次郎、丸三銀行破綻で閉店し、美術品などの貿易業を開始	←**明治 17 年**→※	※『**妙宗先哲御本尊鑑**』刊	**↑幼少期、に博多呉服町本岳寺で得度・龍辨**
梁山、日蓮宗大教院の日薩から勘当さる	←**明治 18 年**		
川合芳次郎と梁山の出会い〈資１〉	←**明治 19 年** 1886 →	**「義経再興記」刊**※→	※末松謙澄がグリフィス名で執筆した英文を内田弥八が訳
※梁山、『日蓮宗教報』元社員として浅草・横浜講演〈資１〉 ※ 19 年３月 13・14 日「日蓮宗大演説会」於横浜「蔦座」P で、梁山講演し「北畠道龍の説を破されたるを聴き嬉しき事一方ならぬ、それより直ぐ次の兄芳次郎に子細を語り」「次の兄芳次郎は少しは妙宗を信ずれども、両親はじめ惣領幾松も未だ信仰の念なく」【教報】明治 19 年４月 18 日号 40 頁（世間雑報・「感ずべき話」中、米蔵の弁） ※４月 14 日付け米蔵の梁山へ面会を求める手紙以下→**〈資１〉**	筥崎宮に伝わる醍醐天皇宸筆「敵国降伏」→ 	**神苑会**※**常明寺復興へ** ※**長崎事件起**こる	**※長崎事件** 1886　定遠、鎮遠という大型戦艦が長崎港に入港し、その大きさに長崎市民が度肝を抜かれ、８月 13 日から 15 日にかけての清国水兵 500 人が勝手に上陸、水兵の乱暴狼藉に警察官と清国水兵が双方抜刀して市街戦に発展。双方 80 数人の死傷者を出した。
林包明は自由民権運動家（伊賀出身）18 年の保安条例で東京退去	**明治 20 年**→		**日統、池上本門寺で随身**
※湯地丈雄、亀山上皇像建立発願 明治 19 年の長崎事件を契機に、亀山上皇が「我が身をもって国難に代わらん」と伊勢神宮などに敵国降伏を折願された故事を記念し、元寇を愛国精神高揚のシンボルとする亀山上皇像設立運動起こした。	←**明治 21 年** 1888	元寇記念碑建立運動 ※筥崎宮の醍醐天皇神勅書紺紙金泥「敵国降伏」宸筆 37 葉。1274 の元寇で焼けた筥崎八幡宮の地より 30 人余りの白装束出でて海に矢を射ると神風がおきた。	※これ以前、常明寺跡（倭町 1-22）から寺格移転 ↑開山は新居日薩（伊勢市一之木町 1-5-19） **明治 21 年佐野前励銅像建立発願／宗門改革・合末論**
川合芳次郎、横浜貿易会社社長	←**明治 23 年**		**佐野前励、日薫らによって九州赴任命じられる**／詳細【おわりに】
常明寺跡から常明寺寺格移転（伊勢市一之木１／重文・妙見像は読売ランドへ）	明治 25 年 1892	博多大銅像起工式	
川合、（管長名代）としてシカゴ万国宗教会議に赴く→〈資２〉	←**明治 26 年**	**シカゴ宗教万国博**	
川合芳次郎、東京貯金銀行頭取に就任・横浜西区元久保に川合寺開基	←**明治 27 年** 1894	日清戦争	
	明治 29 年→		山本讃七、北京王府井で大街で山本写真館開業〈塩澤〉
日宗生命保険株式会社設立（川合芳次郎社長）〈資３〉	←**明治 30 年**		
「当会社は，日蓮宗篤信素の発起したるものにして，其目的は，本宗信徒相互救済の便を図り，併せて会社純益の内を以て，本宗拡張の資に供するに在り。…当会社は，此の有力なる寺院と熱心なる信徒との団結に依りて社業を拡張し，興学布教其他慈善の業を資け以て，本宗の隆盛に裨補するところあらんとす。 布教費，興学費及寺院火災補助費ノ資金ニ供シ度旨出願セシニ，同十月十日，管長大僧正小林日董殿ヨリ承認セラル」→**〈資２〉** 〈「同会社の代理店は、…著名の市邑には悉く之を設置しつゝあり（代理店引受人は、無論本宗篤信家)」《日宗新報明治 30 年１月》との記述があることから、日宗生命の代理店は、日蓮宗の熱心な信徒が引き受けていたことがわかる。保険法話とは、日宗生命のみが普段から被保険者の長寿と幸福を祈禱しており、他社の被保険者よりも長寿できるという内容の法話であった。→**〈資３・論文註〉**	明治 31 年 	大隈重信内閣総理大臣 ←『日宗哲学』明治 28 年２月号口絵／井上円了博士序文「英訳日蓮宗大意に掲載したものを転載」／画像上に日薫の書がある。 	
川合芳次郎、燈明寺（右欄伽藍絵図・写真）を〝七千余圓にて払い下げを受け〟る〈資３〉	←**明治 34 年**	本化宗学研究大会	日統（龍辨）智学の日蓮主義講習会に学ぶ
日宗生命、日宗火災を並設	←**明治 36 年** 1903 →	**大銅像除幕**	
伊勢誓願井戸、神都霊蹟復興会が復興；島田勝存師他；二本榎 1-37	←**明治 37 年** 1904	**日露戦争勃発**	
↑日宗新報 38 年 10 月勧募記事／↓大正 13 年川合氏が取得整備**《後》**		**日露講和条約**	
※常明寺跡地の倭姫陵復興の為、伊勢に「神都霊祭会」おこる	←**明治 38 年** 1905	↑南満州の特権を得る	高鍋、『大亜細亜人』創刊（横浜妙光（香）寺『日本之柱』の後継）
「宇治山田、間の山常明寺誓願碑（大正七年建立）」『事典』			
日宗火災保険株式会社破綻解散〈資３・４〉	**明治 39 年** 1906 →		**岩田秀則（新庄市出身）北京に渡り山本写真館勤務**
農商務省は日宗生命保険株式会社に新契約募集停止命令〈資３〉	←**明治 41 年**		→資料曾存　八木氏の父・繁雄氏は北京の同仁会医院の医師で（引き上げ後、池上に八木医院を開業；曾て善隣協会会員・西川誠氏聞き取り：大森区役所調べ／大日本建国史学会：高鍋日統代表：百井正明宅：建築業）
	明治 42 年	梁山、天晴会の結成に参加	
	明治 43 年	佐野前励宗務総監	**岩田秀則、北京にて写真館独立開業**
	明治 45 年	７月、明治天皇崩御 神保辨静・稲田海素は宗宝調査委員	嘉仁親王 33 歳、践祚し、「大正」と改元
「この大日本国衛護の護本尊は大正元年十月京都府相楽郡加茂村兎並燈明寺（川合氏所有）境内三重宝塔中より出現」→伝・大本尊出現〈資５〉	←**大正元年** 1912	５月加藤文雅遷化 46 ９月佐野前励遷化 54	

大正３年

燈明寺三重塔、横浜三渓園に譲渡移築（於：三渓園調べ）

第１次世界大戦～大正７年 11 月 11 日

『日蓮聖人御真蹟』19 号発行 P

巻頭口絵に玉沢・藻原寺真筆本尊と並び「大日本衛護之本尊」掲載

発行者二本榎木 1-38　神保辨静（宗務院 1-15）／編集実体「日宗新報社」

「先年前神保総監中山法華経寺の御真蹟写真帖発行の際即本尊抄の首に玉澤の建治の御本尊、藻原の文永の御本尊と並べて彼偽物を載するのみならず其解説を求られたれども拒絶し了れり」稲田手紙《資 15》

『日蓮聖人御真蹟』20 号発行完結／ PDF

※「大本尊御真筆は同氏（川合）之を奉持し今回献納に際して大隈首相を数回訪問する等同氏大に斡旋せられたり」説明書※《資 5》

※日蓮宗代表者管長　小泉日慈　大日本国衛護大本尊「説明書」《資 6》

付該奉献品目の宗達

龍山「宗義違犯殊に該本尊の真偽未決予は寧ろ偽と断ずるより斯る物を献納は不敬虔不謹慎断然不可なる旨をもって我宗務総監及教務課長に内々建白せり当局は乃ち該宗達を取消したり」《資 7》

内局、龍山に〝詰問的説明〟を要請

龍山、直ちに詳細論述回答、当局は感謝状を寄せたが《資 7》

稲田海素のもとへ川合の宅より子息を伴い彼本尊の真偽の鑑定を要求「後人の偽造に無相違事を確認候間無遠慮に川合父子に対し愚見を吐露致候其帰途直に佐野教務課長（貫孝）に面会致更に前と同様委細申述候」《資 8 》

突如『日宗新報』に奉献の記事

「（梁山師は）玄釋執筆数日前までは大学教員室に於て或真或偽と評せりと聞く」「玄釋は宮内省に納まっている以外は未だ全文を発表して居ないから其内容が如何なものか非難者自体が見ていないで（広・略２種あるとの弁）」「清水梁山師に回答を促す公開状」《資 9》

奉献本尊玄釋　日蓮聖人末弟　慈龍梁山謹記《資 10》

管長及教務に龍山建白数次、最後に得たる答書の要《資 7》

①奉献手続の進捗は既にここに至る今これになんともする能はず

②縦令宗義に違するも布教的活手段善巧方便下種結縁の為めなり学者は宜しく学問的に研究せよ、為政者は自ら為政者としての教策あり

宮内大臣官房総務課長　近藤久敬より通達書

「現品は 11 月１日以後　11 月３日に奉献せよ」

（「聖日蓮法華礼誦要文」（川合寺蔵版　発行者;川合芳次郎　発行所:二本榎 1-52　川合昇　５年 11 月９日発行）**P**

真宗東本願寺法主を導師として一代蔵経及び靖国蔵経を各宗共同で奉献した奉告法要

「開光式には、都下二百の寺院相集り、梁山氏の詭弁非宗義の説明を管長始め黙然信受」「奉献前に至りて神保辨静師と同道して美術学校教授大村西涯氏に鑑識を乞いたりしに氏曰く断じて聖蹟に非ず恐らくは敷写ならん」／「清水梁山師に回答を促す公開状」『中外』《資 9》

本尊奉献（京都御所）《「聖日蓮法華礼誦要文」》

京都御所御大典

「（龍山が）切言せるに終に当局の愚弄状に接せりここに於て乎最早内々建白忠諫の無効なるを覚え日宗新報に宗義的批判を寄稿せしに当局これが掲載を禁止せり」（『中外日報』記者に寄するの書）《資 7》

「日宗新聞亦該本尊及び梁山氏の玄釈を十二月号に掲載殆ど満幅此義ならざるなきより該主筆長瀬氏を対告としてその非違糺明論を寄せたり同誌は殆んど氏の機関誌なれば拙稿掲載に躊躇の態なるを察したれば竟に『我宗門』十二月号に」（『中外日報』記者に寄するの書）《資 7》

山川智応に手紙往還８状《資 11》

山川氏「天皇本尊否定、大日本国衛護大本尊実在の形木の写し」

本多日生に手紙往還２状《資 12》

「天皇本尊珍説、彼の本尊の真偽が一個の問題と相成候事も中外斉しく承知の事と存候」

稲田海素師と書簡往復《資 8》

大正５年 1916

龍山、『統一』１月号「本論その１を公開もって宗門大方の警省を促すに至れり」↓

『統一』１月号に「清水龍山師の宗義に関する書簡」掲載

天皇本尊論及び真偽批判と各宗共同で蔵経奉献の批判／《資 13》

↑同号に本多日生「日蓮聖人終生一貫の主張」掲載《資 14》

稲田海素「後世野心家之所偽造無相違者也」の証明書《資 15》

当局者の弁明「管長は絶対権なり管長が認めて以て真と断ずるものに異論を挿む者は一宗の秩序をみだす者なり」／「清水梁山師に回答を促す公開状」『中外』《資 9》

田中智学の返書《資 16》

↑「中外日報に」清水梁山師に解答を促す公開状」掲載

『日宗新報』に「玄釋」を撤回掲載

「昨秋大典に本尊に添えて奉献せるは彼の短編に非ずして此の長編（曼荼羅大要）なり」と※第六王仏一乗説変わらず

↑『偽日蓮義真日蓮義』追記

また〝紺紙金泥に書写したものは梁山が沐し一字礼拝して謹写したもの〟ともする

龍山『偽日蓮義真日蓮義』刊行

「小生考うるに、彼人の説をそんなに信ずるものがなき故に候。東京にても梁山氏の神道談は、みなみな閉口致居候由本多氏は湖徳会にて打撃的に講談候由、天晴会にても本多氏はそれを説き候由。昨夜帝大法科生の来談に、梁山氏は卜部氏の伝という例のアビル文字なんというものを説き候為め、世間学生は最早それは御免なりと遁げ出し候由に御座候」（『偽日蓮義真日蓮義』反響集・東京・某学匠手紙）

← ３月３日

← ７月 28 日

← ８月 15 日

※↓ ８月 23 日対独宣戦布告／大隈重信内閣総理、翌４年１月対華 21 ヶ条要求を提出

24 日奉献本尊開光式

← ９月 15 日

※↓

←大正４年 1915

※↓

← ８月 24 日

← ９月 17 日

← ９月 21 日

← ９月 27 日

← ９月 28 日

← 10 月奉献前

← 10 月７日

（10 月初旬）

10 月 15 日

10 月 21 日

11 月３日

11 月 10 日

11 月７日～ 12 月 20 日

12 月 14 日～ 22 日

12 月～５年正月頃

1 月 15 日

1 月 16 日

2 月 9 日

2 月 25 日

2 月 26 日

3 月 5 日

4 月 28 日

燈明寺由緒／説明書記載

人皇十四代元正天皇御宇養老元丁巳年吉備大臣唐土ニ在テ霊木ヲ感得シ以謂我帰朝セバ観世音ノ尊像ヲ作ルベシ志念成弁セバ直ニ我日本国ニ至ラント之ヲ海中ニ投ズ唐土ニ在ルコト十九年

人皇四十五代聖武天皇御宇天平七乙亥年帰朝ス遂ニ難波浦ニ其霊木ヲ得タリ仍テ行基菩薩ト心ヲ合セ観世音ノ尊像ヲ彫刻ス是則チ燈明寺ニ安置スル所ノ霊像ナリ聖武天皇叡聞シ給ヒテ奇ナリトシ詔シテ岡田ノ加茂ニ営ミ南都ヨリ艮ノ方守護トシテ之ヲ安置シ勅願寺ト而シテ寺号ヲ龍王谷山観音寺と称セリ

人皇五十代桓武天皇御宇延暦三甲子年奈良ノ都ヲ長岡ニ遷サレ同十三甲戌年更ニ都ヲ山城国乙訓郡（平安城）ニ遷サレ給フ都守護トシテ比叡山延暦寺ヲ建立セラレタルニツキ為ニ勅願寺ノ号モ解ケ遂ニ衰頽破廃ス

人皇五十六代清和天皇御宇貞観五癸未年弘法大師次階ノ弟子真暁上人之ヲ再興ス清和天皇ノ勅令ヲ蒙リ多クノ山林田園ヲ附セラレ以テ再ビ勅願寺ト為ル

人皇百一代小松院天皇御宇応永十癸未年重テ宣下ヲ蒙リ勅願寺ト為ス而シテ後春秋漸ク遷リ伽藍等荒廃ス

人皇百四代花園院天皇御宇康正三丁丑年天台宗沙門賢昌坊忍禅再ビ堂宇ヲ興シテ真言宗ヲ廃シ天台宗ト為シ寺号ヲ龍王谷山東明寺トス而シテ又星霜ヲ経テ荒廃シ軒傾キ瓦堕チ香灯法器什宝悉皆散失シ僅カニ残ル所目今ノ本堂三重塔観世音ノ尊像ノミ然ルニ寛文元年四月京都本圀寺僧喜見院権律師日便上人深ク歎イテ霊跡ノ廃亡ヲ訴ヘタルニヨリ伊賀大守少将高次公之ヲ再興シ天台宗ヲ改メテ日蓮宗ノ精舎ト為シ寺号ヲ本光山燈明寺トス山林田畑ヲ寄附シテ之ヲ復古セリ

明治三十五年燈明寺廃滅に至ラントスルヲ憂ヒ大本山本圀寺住職旭大僧正及ビ当時ノ管長大僧正浜日運上人等協議ノ上妙鏡居士川合芳次郎ニ托セリ居士ハ明治二十六年日蓮宗管長大僧正小林上人ノ嘱託ヲ受ケ米国シカゴ府ニ開会セル万国宗教大会ニ出席シ其帰朝ノ紀念トシテ妙鏡山川合寺則チ当寺ノ建立シアリタルヲ以テ該燈明寺ヲ当川合寺ノ本寺ト為シタルモノナリ

※明治 38 年「法華本門大虚空会三重曼荼秘記」

【三渓園移築】

原富太郎（三渓）は初代原善三郎の孫の夫。善三郎に篤実な姿勢を認められ信頼され家督を継ぐ。明治 39 年に庭園を市民の観覧に開放。あるとき佐々木信綱氏に「あのてっぺんに塔が欲しいね」といわれた。富太郎の故郷佐波の神戸に三重塔があって、いつもそれを見ていた→『三渓園・戦後あるばむ』72 頁摘録要旨

【WIKI 等の燈明寺の記載】

燈明寺は、現在の京都府木津川市兎並（旧相楽郡加茂町）にあった日蓮宗の寺院。現在は廃寺同様であるが、宗教法人は存続している。建物の一部は、横浜市の三渓園に移築され現存する。旧本山は、横浜川合寺。

『燈明寺縁起』（元禄９年・1696 年成立）に伝える寺伝によると奈良時代、聖武天皇の勅願により行基が開創したとされ、貞観５年（873 年）清和天皇の勅願で空海（弘法大師）の弟子真暁が再興したという。寺号は「東明寺」とも表記する。建武年間の兵乱で廃絶した後、康正年間（1455 年 -1456 年）、天台宗の僧忍禅が復興。本堂と三重塔（いずれも横浜市に移築されて現存）はこの頃の建立である。寺は後に再び荒廃。寛文３年（1663 年）頃、日蓮宗本圀寺の日弁（日便）が再興し、本堂、三重塔を修理した。寛保３年（1743 年）には、日賢が三重塔を修理している。

近代に入って 1901 年（明治 34 年）、実業家で日蓮宗徒であった川合芳次郎が財政危機に陥っていた燈明寺を買収。1914 年（大正３年）には、実業家で美術品収集家でもあった原富太郎（号 : 三渓）が保存のために三重塔を横浜の三渓園に移築した。本堂は移築されずに残っていたが、1947 年（昭和 22 年）の台風で大破し、部材は解体のうえ保存されていた。1982 年（昭和 57 年）、三渓園に本堂の部材を移動し、移築工事に着手。1987 年（昭和 62 年）に移築工事が竣工した。

同地には燈明寺の鎮守であった御霊神社があり（本殿は重要文化財）、神社の左手前に燈明寺本堂、神社の右手奥まったところに燈明寺三重塔があった。燈明寺の旧仏は現地の収蔵庫に保管されている。

旧境内に建つ収蔵庫内には、千手観音立像、十一面観音立像、馬頭観音立像、不空羂索観音立像（伝・如意輪観音）、聖観音立像が安置される。各像はいずれも木造で、鎌倉時代末期の作とみられる。正徳３年（1713 年）、海住山寺の僧如範の著になる『南山城三十三所順礼』には、燈明寺の本尊は「六観音」とある。六観音とは、聖観音、千手観音、馬頭観音、十一面観音、如意輪観音、准胝観音（またはこれに換えて不空羂索観音）を指すが、燈明寺収蔵庫に現存する観音像は５体のみである。元禄９年（1696 年）の『燈明寺縁起』にも当寺には千手観音立像を中尊として、十一面観音、馬頭観音、如意輪観音、聖観音の５体を安置する、とある。現存する５体は像高もまちまちで、すべてが一具の作とは考えられない。不空羂索観音立像（伝・如意輪観音）の胎内からは徳治３年（1308 年）の年紀のある、結縁交名の紙片３紙が発見されている。紙片の墨書から、この像は興福寺の別会五師が関与して制作されたことがわかる。別会五師とは、春日社若宮の「御祭」などの行事にかかわった僧侶集団であり、この不空羂索観音立像と、造高の近い千手観音立像、十一面観音立像は興福寺周辺の仏師の作とみられる。これらの仏像は、川合芳次郎記念京都仏教美術保存財団が所有・管理している。

NPO 法人ふるさと案内・柳氏談話／ Net

江戸時代寛文３（1663）年頃に、本圀寺の僧日便が兎並村領主・藤堂高次の助力を得て再興。藤堂高虎は日蓮宗を信仰していて、藤堂藩がパトロンになって護っていた。この時に法華宗、本光山燈明寺に改めた。江戸時代後期には「南山城三十三箇所霊場」第３番として多くの参詣者で賑わったが、近代になって衰微。大正３年に三重塔を三渓園に移送するとき、列車に乗せるために心柱を切って運んだ。

【梁山の「法華本門大虚空会三重曼荼秘記」】

明治 36 年 10 月『日宗新報』掲載

※弘安五年八月十三日、日興上人授与・佐野妙顕寺蔵『妙宗先哲本尊鑑』巻之二 61 丁／ **P**

「檀那松木文恭ニ酬ユ　別に図有り之ヲ副フ」

【龍山の梁山玄釋指摘要旨】

①聖天子金輪大王即天皇陛下なる祖判無し

②十方分身諸仏等並記は弘安以後無しは梁山の説だが※

③５月５日は大寇前で予め調伏は祖判に矛盾

④真筆なら如何に秘蔵しようと人の議すもののはず

⑤出現由来がおよそ信憑すべきものではない

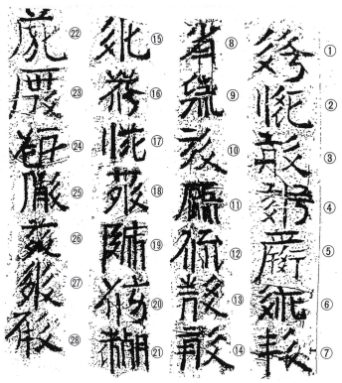
⑥絹本の本尊は世尊寺の例有るも希有、考証を

⑦筆致は真筆とは疑わしい

⑧讃文の本門寿量仏、衛護之を衛護日本国は例無し

⑨真筆と仮定しても国家擁護祈祷本尊たる意義無し

	大正 6 年 1917	ロシア革命	
5 月 21 日、燈明寺本堂（移築前）国宝指定 通達「燈明寺住職　川合玄妙殿」 	←大正 10 年 1921		
	大正 10 年 11 月→	裕仁親王、摂政に就任	**高鍋日統『国難降伏論』刊行**（統一通信／麹町壱番町） ↑巻頭に奉献本尊及び三渓園移築前の燈明寺本堂の国宝指定の意義と六百年前に大亜細亜主義の理想を海外に日持上人大陸宣教の意義を掲載 目次中「支那救済本尊霊の発現」 **P**
	大正 11 年 1922 → 大正 12 年 1923 → 大正 13 年 1924 →	**立正大師号宣下** **虎ノ門事件・大震災** 小谷部全一朗の著書『成吉思汗ハ源義経也』が大ベストセラーに	**岩田秀則、沢村専太郎教授に伴い龍門石窟等各地撮影** **高鍋日統の日持上人遺跡研究会、シベリア調査** **高鍋日統、水城に大陸山水城院を建立（大亜細亜人）** **福岡香正寺住職** 精神作興運動に対し教団有志の僧俗は国本会を起す
芳次郎、誓願井戸の地を復興（明治 37 時点で取得？）〈**資料地図**〉 	大正 14 年 1925 大正 15 年 (昭和 1 年) 昭和 2 年 1927 **昭和 3 年** 1928 → **昭和 4 年** 1929 → **昭和 5 年** 1930 → **昭和 6 年** 1931 →	治安維持法公布 12 月 25 日、天皇崩御 2 月、大正天皇大喪 **梁山遷化** 龍山立正大学学長就任 満州事変	摂政裕仁親王が践祚、昭和と改元 蔣介石、首相に国民政府による中国統一に協力要請 **日統、志賀島に蒙古軍供養塔建立** **3 月、田中智学『大国聖日蓮聖人』刊《資 17》** **岩田氏、11 月に山本写真館継承 (敦煌遺書複製技術 / 東洋美術・宝石取扱)** **燈明寺三重燈（三渓園移築）国宝指定** 朝鮮軍、満州へ越境出動 「林は謹厳実直な人柄で、天皇家には忠誠無比」
日統、徳王に奉献本尊と法華経を手渡す 昭和一三年 **川合芳次郎寂 84 歳**	**昭和 7 年** 1932 → **昭和 8 年** 1933 → **昭和 10 年** 1935 → 昭和 11 年 1936　※ **昭和 12 年** 1937 → **昭和 13 年** 1938 → **昭和 14 年** 1939 →	日蓮宗托鉢僧を襲撃 上海事変 2・26 事件 張家口、自治政府首都 張家口興亜院蒙疆連絡部 ※ 4/11 旧本門法華宗幹部を曼荼羅国神解釈（現相鬼畜）を不敬として検挙	**2 月、血盟団事件　日蓮遺文削除問題** 3 月、満州国建国宣言 **5 月、5・15 事件《資 18》** **日統、『現人神と皇軍精神』初版刊行** ↑東京湾要塞司令部及び横須賀偕行社での講演録 **2 月、博多元寇記念館に奉献本尊奉安**（大亜細亜人） 「昭和 10 年 1 月迄水城院に奉安されていたもの」日統↑ 2 月、立正大学全焼／虚溝橋事件（日中戦争勃発） **『現人神と皇軍精神』2 版**／「同志、聖天子奉安護国大本尊の信者・**百井正明氏**」※池上に**正武護国会**大道場建立し、之が開場式と日統の入満施本用／建設業 **志賀島蒙古軍供養塔に徳王参詣** **日統、蒙古開教監督、厚和駐在・包頭に本尊奉安《資 19》** ←※ **2 月、曼荼羅国神不敬事件** 8 月、馬田行啓教学部長「一大仏世界の大絵曼荼羅を地上に織り出すことを使命とするのだから」『教法』
 宣化市立化寺の古塔 岩田氏は 16 年から入手した遺物の調査に赴き、書き込みの文字〝宣化〟※から宣化城の「立化祖師」の伝説を持つ同寺に行き着いたと思われるが、下記※の点を考慮すると遺物は宣化を指さない可能性もあると思われる。 ※遺物の「宣化」は「化」の字が「花」という形になっている。女真文字では「礼」が該当するという（松澤）が、この遺物の場合は女真文字ではなく宣化の城、宣化県張家口と漠然と示した可能性もある。	昭和 16 年 1941 **昭和 17 年** 1942 →	12 月開戦	4 月、三派合同 **日統、張家口財神廟に立正興亜道場創設** （上田鉱業敷地） 『聖雄日持と豊太閤』大日本建国史学会・徳持町 446 ↑「護国大本尊は一切の宗教及び政治統一の本尊」
	昭和 18 年 1943 昭和 20 年 1945 **昭和 21 年** 1946 → **昭和 23 年** 1948 → **昭和 28 年** 1953 →	龍山、寂 敗戦 (戦後、正法護持財団解散)	**日統、宣化に宣化立正興亜道場創設** **日統、帰国** **岩田氏、帰国**。写真館開業　池上在住（六老僧略伝） **日統、遷化（水城院日統）** ※奉献本尊は戦後、川合寺より佛所護念会が預かり（佛所護念会は伊勢の神々を敬い、誓願井戸を顕彰）
【宣化遺物関連】※ ※ 11 年まで年代重複アリ **昭和 11 年** 1936 →			**昭和 11 年、岩田氏は中村某が持込んだ〝北京の東安市場で求めた、とする塗銀盒を入手。中に麝香鹿皮表装文書 3 篇。14 点収集。16 年に「宣化」を調査、**「立化祖師」伝説から立化寺古塔墓穴から発見されたと了解。
 	昭和 28 年 1953 → ～**昭和 31 年**頃→ **昭和 32 年** 1957 →	高鍋日統遷化 前嶋信次氏は戦時中、南満州鉄道東亜経済調査局に勤務。東亜経済調査局は 1920 年代以降大川周明が主宰、東南アジア地域を調査研究。1929 年独立、大川を理事長とした。1939 年の満鉄調査部の拡充に伴い再び満鉄に統合、「大調査部」に属してイスラム世界・東南アジア・オーストラリアを担当地域とする分局となった。回教圏研究所と並ぶ戦時期イスラム研究の中心として、前嶋信次など中東研究者・アジア研究者を育てた。／◆濱田本悠「使徒ポーロの人性観」1918 東京大学卒業論文／鑑定書は別々	**岩田氏、立正大、前嶋信次教授**（蓮永寺信徒？）**等に遺品紹介** **前嶋信次教授、慶応義塾大学三田史学会の機関誌『史学』3 月から 9 月にかけて上中下の 3 回にわたって『日持上人の大陸渡航』掲載** ↑発表直後、京都大学の西田龍男・藤枝晃は遺品中の西夏文経典は法華経ではなく華厳経で、内容も継ぎ接ぎで、近年の複製品を切り貼りし捺印・書き込みしたものであると指摘。
	昭和 37 年 1962 →		**4 月初、浜田本悠・前島由緒書。21 日岩田氏逝去** ↑岩田氏は帰国後は大田区徳持町に住む〈**資料地図**〉
	昭和 46 年 1971 → **昭和 50 年** 1975 →		**（著者自選論文集）『東西文化交流の諸相』に『日持上人の大陸渡航』再録、「義塾賞」の対象にも。《資》** **高橋智遍師『日持上人研究』で聖筆鑑定・文献学立場より文書を中心とした遺物を否定、奉献本尊の筆致に似ていることを指摘。**〈宣化文書はどう考えても日蓮聖人の直筆や日持上人のそれではなく、日持上人の時代をはるかに隔てた近代人の手になるもの〉**《資 20》**
	昭和 58 年 1983 →		**前嶋信次教授、逝去 85 歳**



※松澤博（東方学会）伝・宣化遺物第２文書裏の〝遼国の言葉、鄭老なる人物が記したとされる詩文解読

確かに西夏文字として読める字はあります。例えば２番および７番の文字、さらに 28 番の文字などです。これ以外は西夏文字に似せて書いたような書体で、今回、解読にあたって、それぞれ似た西夏字を採って何とか意味をとろうとしましたが、全く文になりませんでした。次にその結果を記しますが、番号に※印を付したものは、それに似た西夏文字を推測して意味をとろうとした結果です。

※１は「為す」「話」「句」のいずれか
（の意味の西夏文字に似ています＝※＝以下略）。
2 は否定を表す語です。
※３は「知識」「なお」のいずれか
※４は「増す」
※５は「項」
※６は「悟る」
7 は「高殿」
※８は「樹」
※９は「血」「雲」のいずれか
※ 10 は「短い」
※ 11 は「一切」
※ 12 は「～において」という於格の文字
※ 13 は「摶」「ゆるめる」「三」のいずれか
※ 14 は「覚える」「何」のいずれか
※ 15 は「すばやい」「槌」のいずれか
※ 16 は「為す」
※ 17 は「あばら」
※ 18 は「道」
※ 19 は「部姓」を表す「カー」か「弾く」のいずれか
※ 20 は「思い別れる」
※ 21 は「間」
※ 22 は「界」
23 は判読不能
24 は判読不能
25 は判読不能
※ 26 は「～と」
27 は「神」
28 は「飾り」
全般にこの文章は二、三字は完全な西夏文字として理解してもよろしいですが、他は西夏文字に似せて、ただ書いたという感がします。したがって、先述のように文や詩として読むのは不可能でした。疑いをもたれる要素が非常に濃いといっていいでしょう。

第２文書裏の上記〝文字〟群右には日持上人の花押もある（左）
右の写真は池上本門寺祖師像台座底銘の日持上人の花押

【本欄のまとめとして１】
◆あれだけ遠忌前後にわたって諸先生に資料を渡し、説明の必要を感じては分を超えて説明も試みてきたつもりだった。事実、宗内の各方にはご理解を戴き、持師のご遠忌に際する彼の地の顕彰については慎重な配慮がなされたものと安堵していた。しかし、それは違った。それはあまりにも狭い了解であり、一歩外に出て社会に対する時、あまりにも徹底さを欠いた対応で責務を果たしたと安堵していたがために、このような事態が起こったのだ。
網野先生があれだけ明確に典拠に引いているものであれば、将来、教科書などにも紹介される可能性すらある。これは後で知ったことだが、何かの手違いで、遺物の図録が先生に渡された経緯があったものらしい。（『福神』８号「星を映さぬ川」稿）

【本欄のまとめとして２】
◆日持真偽未決遺物の身延献納だけで、こんなに拘束される組織の雰囲気。彼の本尊が献納に動き始めた時、それを止めることの困難は私の状況を遙かに超える。当時、責任者がたとえ概ねの真実を察知しても、止められない状況があった。昭和 10 年まで彼の博多の元寇記念館に、奉献本尊が奉安されなったことに、何かその間の事情を感じる。

昭和 61 年 1986 →

11 月３日→

11 月 20 日→

昭和 62 年 1987 →

昭和 63 年 1 月→
平成元年 1989 →

平成３年 1991 →

平成４年 1992 →

平成５年 1993 →

平成６年 1994 →

平成 12 年 2000 →

※網野先生は山梨出身で、身延を訪れた際に宮崎英修先生が三洋石油刊の図録を渡した。（宮崎先生も戦時中、従軍僧として大陸に赴任）

遺物、好意で身延献納

←高鍋日統の活動と、日統が日本に留学させたラマ教徒修業生の日本での消息などについてボン大学日本文化研究所のパンツァー所長から、モンゴルの研究者への資料提供要請（数十人の留学生が池上本門寺や筥崎八幡宮などで修業していたが戦争の激化のため帰国させたが、彼らの帰国後の消息が解らない）

10 月、青森の佐藤拓温師から記事掲載依頼〈宣化の日持上人遺物が出土したと伝わる立化寺の古塔の写真を入手した、しかしこれら遺物は前嶋論文で肯定されるもいまだに真偽未決の遺物であり現在遺物も誰が持っているか行方不明である、しかし青森の写真家が塔の写真を最近入手し地元紙に前島説のみの背景をもって発表し、その後になされた真偽論に配慮ない説が広まる恐れもあって苦慮している、そこで、そちらの新聞に私の記事を掲載し、地元の人に正しい認識をもっていただきたいと思うので記事を書きたい〉

新潟県長岡市の八木不動産の社長・八木敦氏から電話
〈日持という高僧の遺物を持っている、最近新興宗教のものがこれを買いたいといってきて困っている、私としてはこの大切な遺物を日蓮宗のしかるべきお寺にお納めしたいのだが、仲介をしてくれないか〉
佐藤師の記事２面に掲載、佐藤師と八木氏に送る。
当初、佐藤師と所有者の関係を疑い所有者詳細伝えず。佐藤師は全く関係なく、後日「新潟の不動産屋」との当方の不正確な情報のみで八木氏を捜し当て、遺物を実見・撮影。多数の重要資料・情報を提供いただいた。

特集記事の素材として、宣化遺物の掲載を考え、再度八木氏に連絡、身延献納を聞く。８月、献納。
「あの遺品については身延山に納まることになったので、私の手元には無い。身延山に問い合わせるように」
↑**経緯要旨**／八木氏は岩田氏から遺品を譲り受けたという。八木氏はに長岡のゴルフ場建設の道路用地取引の件で三洋石油に借財。八木氏と社長・笠井氏交渉の際に遺物のことを話す。笠井社長は大陸で両親を亡くされていて、遺物に興味を持たれ、遺物を譲り受ける。新宿の本社で、遺物にお経をとのことで訪ねたのがすぐ近くの常圓寺。及川真学上人は海外布教後援会の代表で博学、この遺品の重要性は既知。某師を通じて、身延献納に至る。

遺品、身延山献納法要カラーグラフ掲載／新聞
東方学院の先生が遺品袱紗繊維を東大タンデム研で測定し、西暦 840 年± 260 年の結果。（素材は古いのだが）
↑ **５月、中村元先生伴い記者会見有り**／疑義資料はお渡しした

※この間随時調査
「遺物は身延に献納され、ある意味では安心である。調査の時間はふんだんにあると思っていた」
日持上人七百遠忌が平成６年に迫るを気づき再調査。

１月『正法』に疑義有りとの論考を佐藤師執筆
６月、新聞、西夏文教典疑義資料掲載企画差止め※
日持上人七百遠忌
↑この年まで中尾先生、渡邊先生などの理解があり、宣化での顕彰は抑えられていた。
↑宗内情報誌で宣化巡拝を募集、企画の方には説明はする。**この後、宣化に顕彰碑とか、説明はした、放置。**

講談社から「日本の歴史」シリーズ発刊。
網野善彦先生執筆００巻『日本とは何か』同書五十九頁に「北方から大陸に渡った僧」とあり、以下六十三頁まであの宣化出土遺物が写真入りで掲載され、網野先生はその遺物を列島の北方との交流を証明する典拠の一つとして稿を進めていた。

↑困窮していた時、九州大学名誉教授で中世史の権威の川添昭二先生からご連絡をいただいた。お尋ねのことは高鍋日統上人についてであった。すぐに当方で確認している僅かな該当資料を送ると、実に詳細な検索資料が送られてきた。数回の資料の往還の後、私は川添先生に網野先生に手紙を書きたい旨をお伝えした。川添先生は説明を聞き、数年前に作成した指摘資料を機会があれば網野先生に渡したい、との私の筋違いの願いを容れてくださった。

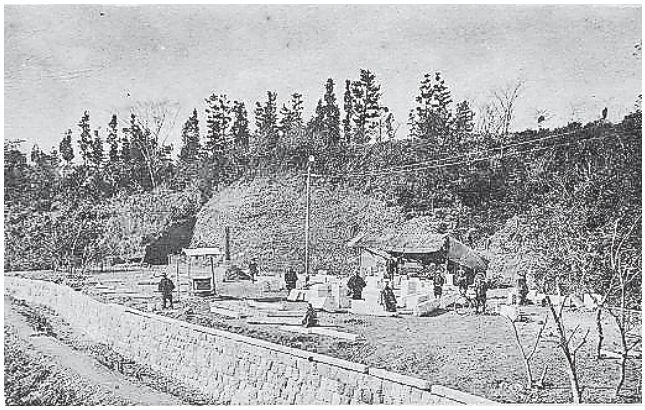
川添先生から送られてきた網野先生の『日本とは何か』第四刷の六十五頁著者注
［（第四刷、網野注）六一頁の写真をはじめとする日持関係の遺物について、中尾堯氏より編集部に御連絡があったのに続き、川添昭二氏の御教示により後世の作ではないかとする西條義昌氏の指摘のあることを知った。この指摘は説得力があり、それ故、六〇～六二頁の前嶋信次氏の説に従った日持に関わる記述の根拠には疑問があり、検討の余地のあることを明記しておきたい。中尾・川添両氏に御礼申し上げる］

↑自身の引用資料の典拠の不備を速やかに是として容れ、右注記文を掲載された網野先生の冷静な姿勢と誠意に敬意を表し、あわせて真偽未決の資料が不用意に配布されるに至った経緯について、遺物の再出現から 15 年間、疑義を確信しつつ強く対応すべだった者の一人として、網野先生及び『日本とは何か』の読者に心からお詫び申し上げる。

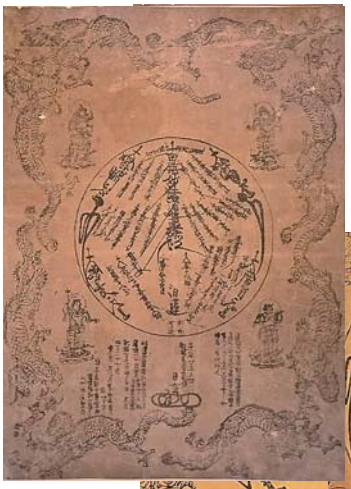
おわりに／時系列表のまとめとして　明治期において大国ロシアと並ぶ中国の脅威に対峙する日本の宗教関係の運動の一つに、明治21年の亀山上皇像建立運動がある（亀山上皇敵国降伏祈祷後醍醐天皇神威示現神風襲来）。そして、その伝説に対峙する日蓮聖人の蒙古降伏祈祷善神感応神風示現の護国祈祷伝説があり日蓮宗の日蓮聖人顕彰運動が起こった。その代表的なものは佐野前励らによる博多の日蓮聖人大銅像建立運動である。そして当時、同時にもう一つ別の系統の護国の日蓮聖人のビジョンを顕彰する運動があった。その背景には明治21年の宗門改革派による合末論提案によって23年に日薫らによって福岡に赴任させられた佐野前励が大銅像建立を実現、こうした旧改革派の業績に対する当局の便乗巻き返しの意図、また明治41年の日宗生命破綻の汚名挽回の意図があったと思われる。それが護国曼荼羅の発生の淵源であり、それに先立つ伊勢誓願井戸顕彰、その二者を併せた護国祈祷霊験の日蓮聖人のビジョン顕彰の動きだったと考える。そこには当時、新進の思想家として自由民権運動の活動家とも演壇を連ねた清水梁山の教風や、明治30年代に曼荼羅研究に熱心だった小林日薫周辺の論考の影響も考えられる。一方、曼荼羅の聖天子金輪大王は蒙古調伏伊勢大廟祈願の亀山上皇の姿を金輪聖主・後醍醐天皇の祈祷の姿に重ねたものと見れば、曼荼羅は元来、尊皇攘夷運動以来の明治新政府の描く天皇像に依拠して日蓮聖人蒙古調伏の顕彰のみの目的で作られたとも考えられ、智学が描く〝世界統化〟などの遠大な夢は読み取れないのである。（梁山は大正天皇に向けた玄釋で敢て亀山上皇等の事績に敢えて触れずに解説したとも思われ、周辺事情から察すると梁山もまた当事者ではなく、結果的に－然るべくしてというべきか－巻き込まれたとも考えられる／資料篇１頁参照）ところで、それは当初、〝ごく普通〟の顕彰運動だったと思われる。それが、明治天皇崩御、政財界に通じた川合芳次郎の復権の機会、などが重なり大典奉献の流れになった。そして、奉献後は、戦争が深刻化して行く中、疑義を懐きつつも、宗団はこの曼荼羅を顕彰した。その第一の宣布者は満州開教の高鍋日統であった。高鍋師は大陸布教伝説の日持上人とこの曼荼羅の意義を重ね、その精神の宣布に務めた。そこから伝宣化出土日持上人遺物の制作の機会も生まれた。そして、敗戦後、彼の伝日持遺品だけが疑義が呈されつつも、大陸に懐いたかつての日本の夢に共鳴する人々の心を惹きつけてきた。それは、その日持上人に擬えた伝説遺物が、期せずして日本の侵略の要素を示さず、むしろ侵略される側の日本、世界統化の日本の夢を託す〝知られざる史実〟を示すことに完結しているからであろう。しかし、その実体はもちろん別である。こうした動きについての研究は今後、日蓮仏教に与えてしまった影響や戦前戦後に横たわる〝日本が目指した夢〟をめぐる社会心理を読み解く上においても、重要な視点と考える。

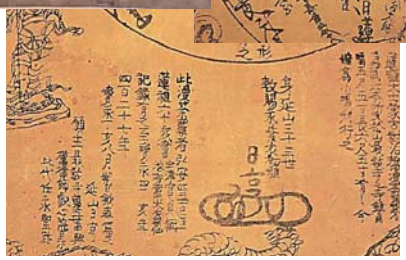
【註】※21年8月、本間海解、佐野前励らの有志は「日蓮宗革命党檄文」を草し合末論を展開、23年には清水龍山を編集責任者として『法鼓』を発行し改良議案の実現と宗門革新への言論戦を展開した。しかし、時代に即応した宗門改革の動きは成らず（諮問総会事件）、佐野師は23年6月既に九州本仏寺へ赴任し去り、改良議案の同志達は敗訴の上、かつて同一陣営にあった日董の処分を受ける結果となり、前管長三村日修は24年5月、宗門の前途を案じつつ遷化した。（『事典』）

【補足参考図版】

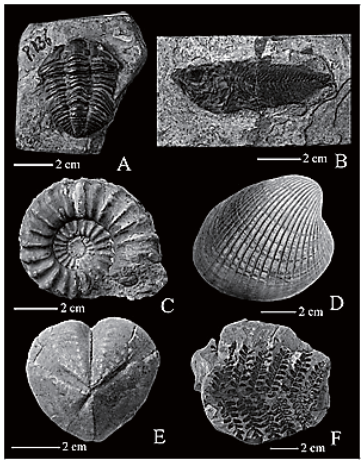


請願井戸蹟復興工事
大正13年
（絵葉書）





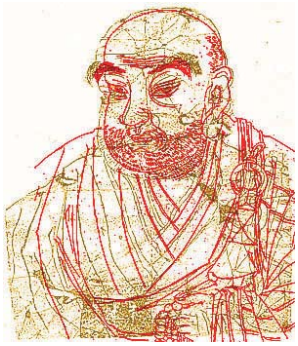
旗曼荼羅のイメージ
押上最教寺（現・八王子）
※画像はヤフオクに出ていた複製のもの



クランツ標本

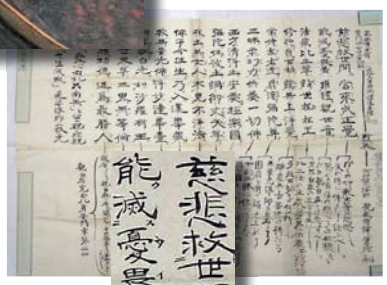
補足資料／**クランツ標本の衝撃**
ナウマンは明治8年（1875年）に来日し、後に東京大学地質学科の初代教授になり明治18年（1885年）にドイツに帰国した。クランツ標本は、ドイツ出身のナウマンが教育のためにクランツ商会から購入を手配したものであると推定される。ナウマン博士は明治10年頃に日本の教育学会に化石の模造を紹介、学問的香りとともに当時話題となった。明治10年には翌年の第3回パリ万博参加を前に上野で第1回内国勧業博覧会が開催されるなど、こうした時代の空気があった。
川合芳次郎が赴いたシカゴ万国博（コロンブス／閑龍万博）でもこうした高度なイミテーションによる展示が多数あったと思われる。
・学問的確信と信仰（日蓮讃仰）的渇仰によって模造された
・伝説の新たな具現化（再創造）ー recreation of legend
・既成の事物の要素を大幅に変更しない限り再創造には自由度がある
（recreation の派生語　→ 気晴し 娯楽）
・力（存在感）の再現はカイロスの予感と共鳴する

右図は河合氏がシカゴ宗教者会議で配布した「英訳日蓮宗大意に掲載の画像として高鍋氏が『大亜細亜人』に掲載した宗祖画像（赤）と伝宣化遺物第2文書の画像（茶）を重ねた。左写真は鍍銀盒内部の日持上人及び年号部分だけが後の打刻によって腐食が剥離し浮き上がった様子。

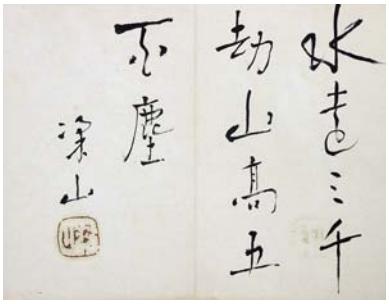


『大亜細亜人』昭和10年10月号
「奉献本尊縮小版を集会参加し信じる者に授与する」との記事／稲田海素・清水龍山の努力もむなしく…

『大亜細亜人』昭和14年11月号
高鍋師の教線はすでにモンゴルの包頭まで達していた。



高鍋師の筆致



高鍋日統師の色紙帳にあった梁山の筆致